



大和川と石川の合流点

会期2001

10/3~12/9

秋季企画展  
改流  
かひりゆう  
江戸時代の大和川付替工事

- 開館時間 / 9:30~16:00
- 休館日 / 月・火曜日、祝日
- 入館料 / 無料
- 交通 / JR大和路線高井田下車 徒歩5分  
近鉄大阪線河内国分駅下車 徒歩15分

文化財講演会

「近世の大和川舟運—大和の側から見つめる—」

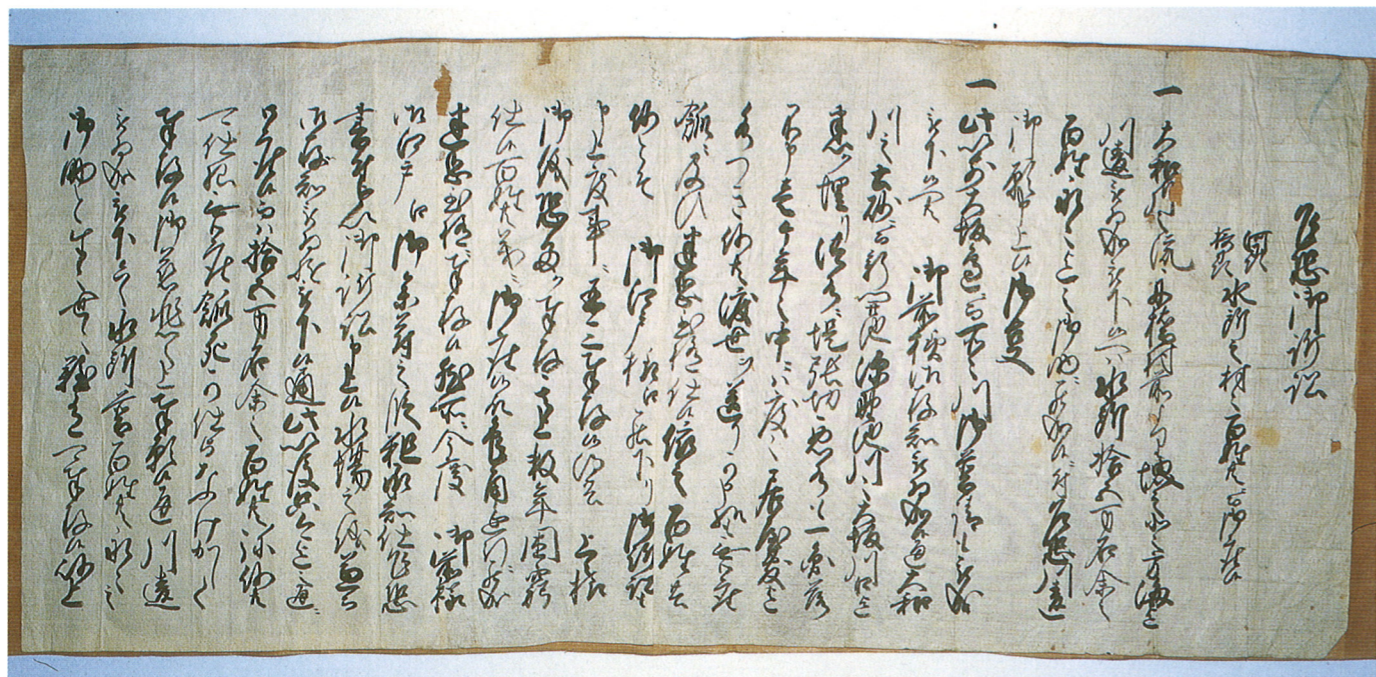
- 講師 / 天理大学教授 谷山正道氏
- 日時 / 平成13年10月28日(日) 13:30~15:00
- 場所 / 柏原市立歴史資料館研修室
- 参加費 / 無料
- 定員 / 60名(正午より受付、先着順)

柏原市立歴史資料館

〒582-0015 大阪府柏原市大字高井田1598-1 ☎0729-76-3430



新川と計画川筋比較図



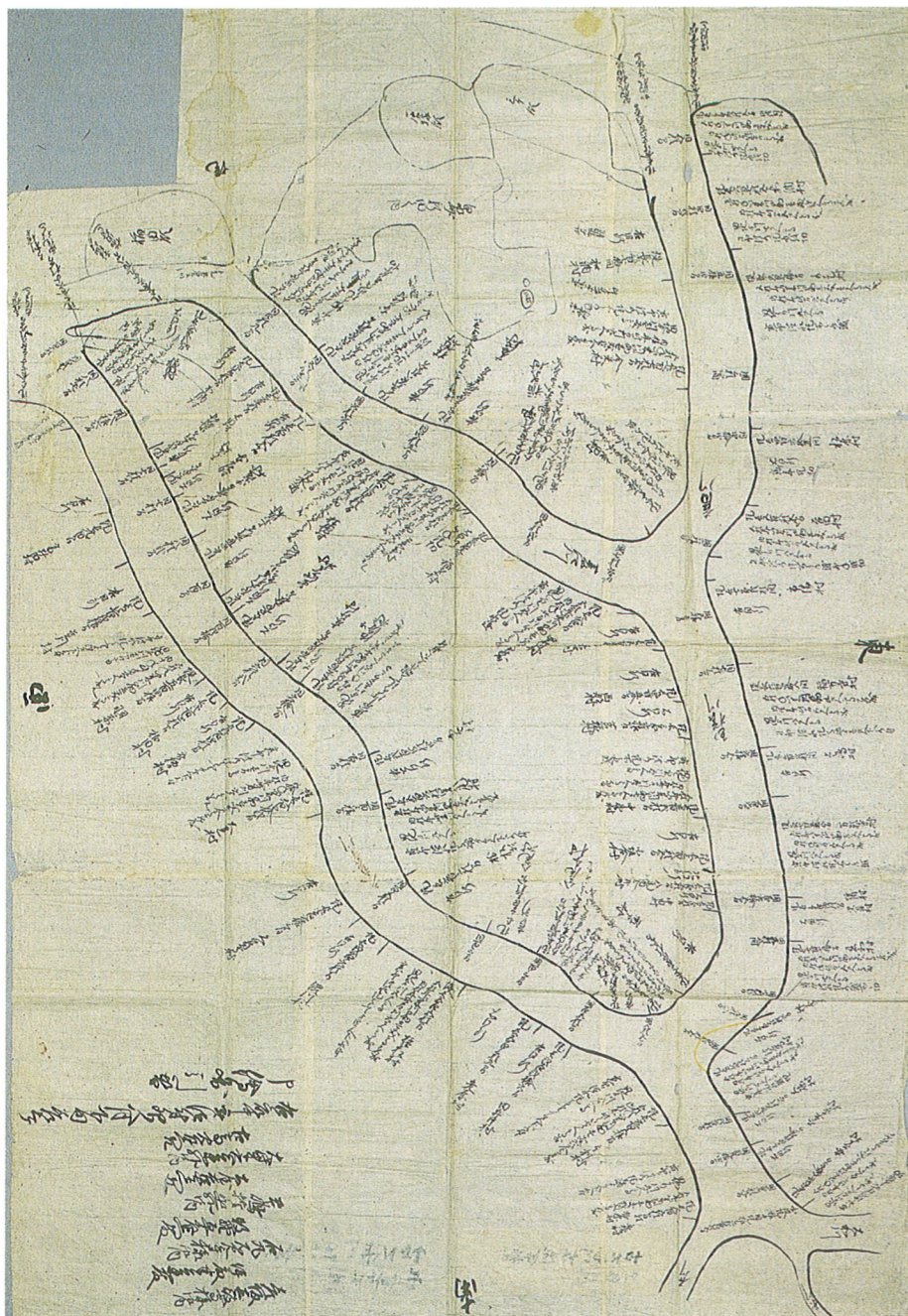
▲川違え嘆願書（貞享四年？）  
撰津国、河内国の総高15万石余の村々が大和川付替工事の早期着工を願う大坂町奉行の藤堂伊予守へ差し出したと推定される訴状の控え。  
中 好幸 氏所蔵。



▲堤切所付箋図（貞享四年）  
延宝年間に発生した旧大和川の洪水と堤防決壊箇所を発生年月により付箋の色を変えて示した絵図面。堤防の復旧や排水路の開削など大和川改善工事の実施を訴えた訴状の付図。  
中 好幸 氏所蔵。



▲新川試案図（年不祥）  
新大和川のルートについて瓜破の北側と南側を通る2案が赤色、黄色に塗り分けて示されている。細かく裁断されており新川への切り替え地点と河口付近の2葉が遺る。  
中 好幸 氏所蔵。



▲堤防比較調査図（延宝三年？）  
旧大和川のほぼ全域にわたり村単位の堤防の長さ、川と周辺の土地との高さの差、同じく50年前と10年前との比較、川幅、前年の洪水の様子などが書かれた絵図面。  
中 好幸 氏所蔵。

▲川違え新川図（年不祥）  
新大和川と落堀川開削、大乘川切り替え、東除川流入、西除川切り替え、十三間堀川延長などの付帯工事を示した絵図。他に紀州街道に架かる大和橋を描いたものも遺る。  
中 好幸 氏所蔵。



▲中甚兵衛肖像画（享保十年）  
新大和川完成の翌年、中甚兵衛は67才で剃髪して乗久を名乗る。この肖像は87才のもので右手に数珠をもち左腰に小刀を差している。江戸の画工稲葉安知筆と伝えられる。  
中 好幸 氏所蔵。

私たちのくらす大阪平野は、南の大和川や北の淀川が上流から運んだ土や砂でできています。その大和川は、今は大阪平野の南のふちを西に流れ、大阪市と堺市の間から海に注いでいますが、江戸時代まではいくつもの川に分かれて北や北西の方角に流れ、とちゅうで深野池や新開池といった大きな池をつくりながら、最後は大阪城の北側で淀川といっしょになっていました。そのころの大和川は水の流れが悪く、一部では天井川にもなっていて、しばしば洪水が起こり、大和川周辺の村々は大変こまっていました。そこで今から350年ほど前に大阪平野でくらす人々は、今米村（今の東大阪市）の中甚兵衛を中心にして、大和川が流れる場所と方向を変えて洪水が起きないようにする工事＝「大和川つけかえ工事」をしてほしいと願うようになりました。しかし、「つけかえ工事」に反対する人々（今の和川周辺の村々）もたくさんいました。

「つけかえ工事」を願う人々は、①大和川の洪水で田畑や家が水や砂でうまり作物もよくとれず生活にこまる ②たとえ堤防がこわれなくても水はけが悪い ③大和川の流れが変われば多くの村の農民が助かる ④大和川や池のあとに多くの土地ができるので作物もふえて年貢がたくさんおさめられる ⑤堤防をなおすために使っていたお金がいらなくなる、と考えました。一方「つけかえ工事」に反対する人々は、①むかしから受けついできた多くの田畑が川底になる ②南側の土地が高いので新しい川の南側では水はけが悪くなり北側では水不足になる ③自然の流れにさかたって川を西に向けるので堤防もこわれやすく洪水になりやすい ④道路がとぎれて不便になる ⑤大和川を通行していた船がなくなるので荷物の運ばんに不便 ⑥船で働いていた人々の仕事がなくなる ⑦新しい川の運ぶ土や砂で堺の港の水深が浅くなり大きな船が入りできなくなる、と考えました。

このように、「大和川つけかえ工事」にはさんせい・反対2つの意見が対立していましたが、その後も洪水はなくならなかったの、ついに今から300年ほど前の1704年（宝永元年）に工事が始まりました。工事は、大和川と石川との合流点に堤防をきずいて大和川の流れを西の堺へ向け、瓜破や浅香山の台地はほりくぼめ、平地では土をつんで堤防をつくり、川はば180メートル、長さ14.3キロメートルの新しい川をつくるものでした。川辺村（今の大阪市平野区）より東を江戸ばくふ、西を姫路・岸和田・三田・明石・高取・柏原はんなどの大名が工事を行い、2月の後半にはじまり、早くもその年の10月13日には完成しました。約7カ月半という大変なスピード工事でした。この間に毎日およそ13,000人の人々が働き、71,503両の費用がかかったと伝えられていますが、1両を約20万円として計算すると、今のお金にして約140億円という工事費用になります。

「大和川つけかえ工事」によって、大和川や池のあとは田畑に生まれかわり、そこでは米や綿が作られました。こうした土地は新田とよばれ、工事から5年後には約1,000ヘクタールにもなりました。一方、新しく大和川が流れるようになったところでは約270ヘクタールの土地が川底になりました。土地を失った人びとには代わりの土地が与えられましたが、住みなれた村から遠くはなれていて田畑をたがやすのにも不便だったため、多くの人びとが村をはなれ、あるいは土地をてばなしました。また狭山池から北に流れていた西除川・東除川周辺の土地は、新しい大和川のために水はけが悪くなり、水害が起きるようになりました。新しい川の運ぶ土や砂は室町時代からさかえた堺の港をうめたて、大きな船が入れなくなりました。さらに、大和（今の奈良県）や南河内地方の荷物を運ぶために新しい大和川を通るようになった剣先船などは、今までよりも時間がかかるようになりました。このように「大和川つけかえ工事」により大阪平野の洪水はなくなりましたが、工事が行われたために大変な苦勞をすることになった人々がいたこともわすれてはいけません。